

伊藤整全集

第二十四卷

伊藤整全集

24

新潮社版

編纂

瀬沼茂樹
平野謙
小田切進
奥野健男

知恵の木の実他

定価二〇〇〇円

昭和四十九年六月十日 印刷
昭和四十九年六月十五日 発行

著者 伊藤 整

発行者 佐藤 亮一

発行人 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一電話
東京二六〇一一一一郵便番
号一六二振替東京八〇八

印刷所 株式会社精興社
製本所 株式会社大進堂

伊藤整全集
—24—

© Sadako Itō
1974. Printed
in Japan.

乱丁、落丁本
はお取替えい
たします。

伊藤整全集

第24卷

目次

随筆
(昭和32年～同44年)

昭和32年

新しい年

福原麟太郎氏に会う

九州旅行日記

旧友逢わず

小説家深沢七郎さん

仙女原田康子さん

文壇交友録写真について

仕事の計画

私の五つの楽しみ

読者と著者とのつながり

書きたくない

カメラと私

他人と自分

外國流儀

チャタレイ裁判の判決に対する抗

議募金への感謝と報告

芸人の生活

フロイト・朔太郎・ジョイス

母のこと

『谷崎潤一郎全集』の解説者として

無関心な飲食者

若い女の人に

作家の言葉

『チャタレイ夫人の恋人』の再刊

昭和33年

三六

三十一

三八

三九

四〇

四

四

四五

四九

四九

五四

五四

五四

愚者の樂園

五

某月某日

二六

乾直恵君を憶う

四

女と男

二八

『朝日新聞』の三つの思い出

七

講演旅行というもの

二五

事実と伝説

八

ウズベクの服装

二七

火野君の人柄

九

〈昭和35年〉

国際会議に出席して

九

パリ、タシケントの旅

一〇

本物と複製

二八

ペン・クラブの例会

一〇

入学試験というもの

二九

ダブリン便り

一〇

私の文学修業

三〇

〈昭和34年〉

貨物船に乗って

一五

手紙

四〇

旅行ボケ

一七

石原慎太郎君のこと

四〇

工大と私

二〇

小旅行の記録

四三

ダブリンの印象

二二

仕事と執着

四四

わがエリク丸に乗って

二五

北海道ブームということ

四五

別荘というもの

一四

売春婦たちの知慧

一七

〈昭和36年〉

六十六年後に人類は破滅する

一七

西洋的になった日本の正月

一八

ニューヨークにて

一九

ロマノフ王朝最後の王女

一九

死者の祭

二〇

外遊日本人の孤独

二〇

アメリカ生活断片

二一

文学者の年齢と仕事

二一

わがままな生き方

二二

結婚の初めと終りの言葉

二二

東京の文化

二三

人種差別騒動の中の母親

二三

『生物祭』を出版したころ

二四

頭の中で整頓

二四

女性と文芸

二五

二月の日記

二五

ニューヨーク日記から

二六

武林無想庵氏

二六

児玉通久先生

二七

〈昭和37年〉

アメリカの女性とロシアの女性

二八

現代女性神話・紳士宝石泥棒

二九

犀星と朔太郎の思い出

二九

バグマンの四十歳での人生観

三〇

超知覚者たち

三〇

ビールを給与された女工さんたち

三一

ニューヨークの質屋

三一

小樽・白神岬

贗霊媒の話

罌にかかった詐欺漢

緑の季節

批評家への希望

読書の態度

飛行機の事故と人間

明治文学十年生

男が世を捨てての時

北海道の村の話

子供とその親たち

女性の若さと老年

北海道

求愛形式論

実現する「近代文学館」

二三

二三

二三

二三

二三

二三

二三

二四〇

二四二

二四八

二五〇

二五五

二六三

二六五

二七一

〈昭和38年〉

日本近代文学館の話

先生のこと同級のこと

青年上林暁

わがふるさと北海道

日本近代文学館案内記

人間の永遠な苦悩

はじめての本

古い同僚の一人として

近代文学史展を見て

老齡について

小樽商科大学

小林多喜二と本庄陸男

二七三

二七五

二七七

二七九

二八五

二八九

二九二

二九三

二九六

二九八

二九八

三〇五

〈昭和39年〉

「近代文学館」その後

三〇九

友情を引き裂いた女

三三三

近代文学館文庫と高見順のこと

三七

ある内輪話

三九

角田柳作氏の思い出

三二

野尻日記

三三

〈昭和40年〉

蘆花の家のことなど

三五

刑法に関係のあること

三六

角を矯めて牛を殺す

三六

読書とわたし

三一

異国でない異国

三三

小林多喜二碑の前で

三四

〈五十人百話〉から

三六

近代文学館の建設

三九

町のチャイムとダンスの引手

三四一

北海道の顔

三四三

着工迫る近代文学館

三四三

鯛とみそ汁

三四六

室生さんのお家

三五二

高見さんの遺志について

三五四

教員をやめたこと

三五五

暖かく眠らせ度い多喜二碑

三五七

〈昭和41年〉

あすの北海道人

三五六

「四大文豪展」への期待

三五九

近代文学館づくり

三六一

「四大文豪展」について

三六三

ニューヨーク世界ペン大会出席記

三六六

国際ペン大会と民族問題

三六八

国際ペン大会に出席して

三七〇

文士討論会に参加して

三七三

感動を生かす素直な写真術

三七六

ペン大会と外国語

三七七

ニューヨーク・ペン大会報告

三八〇

ロンドンだより

三八四

日本出版文化の流れ

三八六

古典とともに

三八八

思想の言葉

三八九

北海道と文学

三九二

高見順の一周忌に

三九三

〈昭和42年〉

煙草の害について

三九五

正義と流血

三九六

近代文学名作展の意味

三九七

名作に不滅の命を

三九九

文士の死

四〇〇

〈昭和43年〉

初めてのアメリカ人

四〇二

歌と詩の思い出

四〇九

忘れ得ぬサン・マルコ寺院の感動

四一一

中島健蔵のこと

四一二

回想と真実性

四一四

日本近代文学館の近況

四一五

突然の死

四一七

水と地震の記

四一八

近代文学館のこと

四二〇

名著複刻の願い

四二三

ポルトガル大使館の話

四二三

古き日のこと

四三五

川端康成氏の横顔

四三〇

〈昭和44年〉

ふるさとの春

四三二

川端康成展のこと

四三三

塩谷村、雪の夜の鈴音

四三四

本と人間

四三七

古い思い出

四三八

病中日記

四四一

知恵の木の実

魔女のうた

四六七

作法の内側

四七〇

間違いない生活

四七三

正直な夫

四七五

人間と正義の衝動

四七八

愛について

四八一

家族愛と人類愛

四八三

魅力ある顔

四八六

谷崎潤一郎の世界

四八八

芸術と道徳と学問

四九一

性の思想の変革

四九四

社会と青年期の衝動

四九六

*

雑纂

五〇〇

編集後記

瀬沼茂樹 五〇三

*

伊藤整年譜

五五九

伊藤整全集 第24卷（隨筆）

知恵の木の実 他
(随筆・昭和32年～同44年)

新しい年

新しい年が来て、それを我々は「めでたい」と言う。私にとっては、この「めでたい」という気持は、まだ、自分の人間としての間違いや、仕事の失敗や、他人にかける迷惑や、恥や怒りや悲しみなどに汚されていない一年という時間のはじまり、として実感される。

この新しい年には、自分の仕事をなるべく立派なものとして成しとげ、恥かしい思いをする行いや言葉をつつしみ他人に迷惑をかけず、少しでもよいことをしたい、という気持で、生活をはじめ。その気持は誰にとっても同じようなことであろう。

ところが、実際は、決して、そのような希望が満たされることはないのだ。我々は、正月の元日から二日のうちから小さい嘘を言いはじめ、他人の陰口を利き、酒をくらって人を嘲笑したりしはじめるのだ。そして一月も経たないう

ちに、自分は、去年と同様、またその更に前の年と同様に、間抜けで意地悪で、嘘つきで、失敗ばかり重ねるところの、つまらぬ人間でしかあり得ない、と言うことが証明されてしまう。同じことさ、どうせ、おれのような奴は、人に笑われ、自分でも当惑している、罪つくりの、いやな奴なんだ、と自分を投げ棄てるように考える。

そのことは、実は、年のはじめから分っているのだ。ただ、年のはじめには、まだ何も描かれない画布がひろげられたようなもので、失敗した線も色も描かれていないから、画布の全体が傑作として出来上るような幻覚を持ち、そのことを「めでたい」と感じていたのである。

しかし、失敗を伴わない仕事というものはなく、間違いのつきまとわれない善行と言うものもない、と私は思っている。我々の人間の生活では、一つの善いことをすれば、一つの悪いことがつきまとうのだ。二つ善い事をしたと本人が思っている時には、多分二つぐらいの迷惑を他人にかけている。そして、もし三つの善い事をして、他人にかける迷惑が二つであるような事態が起れば、私はそれが、相当よい生活だ、と思っている。

だからもしある人が五つの善いことをしながら悪いことは一つしかない、というようなことがあれば、それは聖人の生活に近いものだろう、と私は思う。

絶対に悪いことをしない絶対に失敗しない、ということ
は、人間にはあり得ない。ただ善い事の方を、いくらかでも多くして、悪いことの数をへらすということならば、我
我凡俗の人間でも考えて、いくらか実行することができる。
正月というのは、そういう善と悪の計算を新しく始める区
切りになる時のことであるだろう。そう思えば、どうせお
れは駄目な人間だ、という考を棄てて、この新しい年をい
くらかでも目出度い年として迎え、そして頑張ってみよう
とする気持ちになれるかも知れない。

福原麟太郎氏に会う

今日、福原麟太郎氏を訪ねて帰ったところである。一二
年前から福原さんが病気をしていることを聞いていたが、
私は遂に見舞いに行く機がなかった。そのうちに福原さん
の病気は恢復し、その病中のことや、予後生活の中での感
想文を、時々新聞雑誌で読むようになった。

前から私は福原さんの随筆の愛読者であった。福原さん
の書いたものを読んでいると、私がいくばくかの学と芸と

をそこから学んだ英文学の源泉にいつも身を寄せている人
の言葉に接する思いがする。また福原さんの人となり、
良質なイギリス人がエッセイという文学形式でしばしば示
したヒューマニズムが具現されているように私は感じてい
た。

だが福原さんは病気になる前後から、書くものが一層味
い深くなっているのに私は気がついた。私は目にふれる限
り気をつけて読んだ。たとえば病院で世話になった看護婦
の話、それから亡くなったお友達の竹友藻風さんの話、ま
た近頃目を悪くした上原専祿さんの書いた短い文章から感
銘を受けた話、また上田辰之助さんの亡くなった時の追憶
記など。

入院の時の看護婦さんの話に感動したのは、私のみでな
かったらしい。先頃、池島信平さんと扇谷正造さんと三人
で座談会をした時も、その話が出た。近來の福原さんの書
くものに心をうたれたのは私のみでないことが分って、う
れしかった。

福原さんのお宅は、中野駅の西北方の野方駅に近い所で、
車は中島健蔵さんの家の横を通る。前に私は二度お伺い
したことがあるが、ちょっと分りにくい所だった。巖谷君
がすぐ見つけた。南からよく日の入る応接間で見た福原さ
んは、二三年前にどこかでお目にかかった時ほど太ってい

なくって、かえって前より健康になったように見えた。しかし病氣は狭心症だというから、根治は容易でないのとのことだった。

福原さんが追憶文を書いていた竹友藻風さんには、大正十三年に出た『時の流れに』という白い厚表紙の詩集があつて、私が二十歳頃にそれを買った話をした。そして竹友さんは、どういう顔だちの人かとうかがった。丈はあまり高くなく、瘡せた顎の張った人だったとお話であつた。私は若い時代にその詩集を読んで、一度もお目にかからなかった竹友さんの姿を目に描いた。

先頃亡くなつた一橋大学の土田辰之助先生の話が出た。私とその土田さんの講義を聞いたこと、そしてトマス・アキナスの経済思想というものをほとんど理解できなかったこと、それから語学が非常に出来る人だったことなど。その他、嘉治隆一氏の話、文士の年齢が延びた話など。巖谷君や土門君も加わつて、一時間あまりもお話していたが、福原さんはあまり疲れたようにも見えなかつた。狭心症というのは、心理的な要素のある病気で、身体に自信を持つことが大切なのだ、というお話であつた。

私は、いまの福原さんは、一度死者の国へ行って人間の運命を理解したというあのユリシーズのような氣がしてゐる。

九州旅行日記

今年（一九五六年）の十一月、九州旅行をした。角川書店主催の講演旅行である。同行は、小林秀雄、亀井勝一郎の二人、主催者側から角川社長と米花、加藤の社員二人が加わる。九州の東南部の旅ははじめてである。

十一日——いつも旅行の前は、仕事に切りをつけなければならぬので急がしい。前夜、『小説新潮』に二月おき位に連載している文章講義のようなものを書き、朝四時頃までかかる。それに続いて、永松定君の訳業で私も名を連ねている『ロレンスの手紙』の序文を三枚書き、夜が明けて六時すぎになる。それから九時まで、二時間半ほど眠る。

九時半、角川の細見さん車で迎に來る。羽田で小林、亀井二氏と一緒に、加藤勝代君同行、十一時の飛行機。はじめ雲中、神戸上空のあたりから雲が切れて瀬戸内海の島島が見える。江田島、柳井の辺で二三枚、アルコ三五で写す。二時半、福岡郊外の板付着。先着の角川、米花二氏の出迎、飛行場から南方へ少し車で行き、太宰府天満宮を見